



もうすぐ立冬ですね。風の冷たい季節の到来です。

11月7日は立冬、暦の上ではいよいよ冬となります。日本では、空気が一段と澄んで、いろいろなものがくっきりと見える季節となりますが、ここオランダでは、曇りがちの風の冷たい季節の到来ということになるのでしょうか。新型コロナウイルスの感染状況が益々厳しい状況になってきました。今回の急な下校に対して、素早くご協力いただきましてありがとうございます。これまで以上に感染予防に努め、日々の授業の実践や実施可能な学校行事にしっかりと取り組んで行きたいと思えます。

◇ 11月の学校行事 ◇

- ・ J A L マナー講座 (中学部) ZOOM
- ・ 漢検 (希望者)
- ・ 英検 (2次)
- ・ スクールカウンセラー勤務日
- ・ 第3回定期考査 (中学部)
- ・ 児童会委員会 (小5・6)
- ・ 避難訓練 (全学年)
- ・ スクールカウンセラー勤務日
- ・ 第2回いじめアンケート (全学年)
- ・ クラブ活動 (小5・6)
- ・ ライデン社会科見学 (小6)
- ・ 教育相談週間 (全学年) 12/9 まで



秋季体力作り『縄跳び大会』

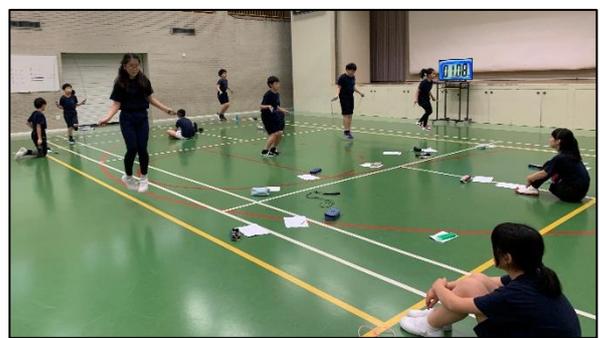
10月13日(火)～23日(金)は秋季体力作り期間でした。小学部では縄跳びに取り組みました。子どもたちは「がんばりカード」を使っていろいろな種目に挑戦し、自己記録更新を目指しました。業間や昼休みを使い、毎日、練習に励んでいました。最終週に行われた縄跳び大会では、努力の成果を十分に発揮して、自己ベスト更新が続出しました。



<小学部3・4年生の縄跳び大会の様子>



<小学部1・2年生の縄跳び大会の様子>



<小学部5・6年生の縄跳び大会の様子>

学校アンケートのご協力ありがとうございました。

先日、お願いいたしました学校アンケートにご協力いただきまして、ありがとうございました。集計結果につきましては、2学期最後の学校だよりにて、お知らせさせていただきます。しっかりと分析し、3学期からの教育活動に生かして参ります。今後とも、ご意見やお気づきの点がございましたら、ご遠慮なくお聞かせください。

シント・ニコラスがやって来る

♪sinterklaasje kom maar binnen met je knecht~

今年もシントさんが、アムステルダム日本人学校にやって来ます。シントさんと言うのは、シント・ニコラス (Sint Nicolaas)のことで、A.D. 3~4世紀に今のトルコにあるミルナの司教として実在した人物でした。その昔、殺されそうになった子ども達を助けたという伝説から、子ども達の守護神として世界的に有名になりました。

また、お供のズワルトピットは、北アフリカの黒人でムーア人の王子の姿をしているようで、ユーモアたっぷりにプレゼントを配る姿は、子ども達から大変愛されています。

さて、12月4日(金)にシントさんとズワルトピットが日本人学校に来てくださいます。毎年、シントさん達は、体育館いっぱい飾られた似顔絵や飾り、子ども達の出し物を見て、大変感激してくれるそうです。そして、最後には、一生懸命に頑張った子ども達に、ピットからプレゼントやペパーノーチエ (Pepernootjes)と呼ばれるお菓子がたくさん配られます。子ども達は今から、この日を楽しみにしています。



☆ 本年度は、感染予防の観点から小学部を1・5年、2・3年、4・6年の3つのグループ分けて実施します。また、本年度は保護者の参観はできません。予めご了承ください。

〈4日の予定〉

13:30	シント・ニコラス、ズワルトピット来校
13:40~15:00	シント・ニコラス祭(体育館)

シント・ニコラスの祭り

「シント・ニコラス」その人は、シント・マルティンよりもやや早く西暦200年後半から300年にかけてトルコの方面で宗教活動に入った人物です。

裕福な家に生まれた彼は、両親の死後、その財力を神の教をを広めるためにたまたま寄港した船に掛け合って穀物をもらったところ、分けてもらった穀物はいくら使っても決して減ることがなく街の人たちの飢餓を癒し、一方、船がローマに到着して積荷を確認してみると分けてあげたはずの穀物は少しも減っていなかったという逸話が伝えられています。

こうした言い伝えから広くヨーロッパでは船乗りと商人の守護聖人として、信仰を集め、特に貿易で栄えたアムステルダムでは、街の守護者としてあがめられてまつられてきました。アムステルダム中央駅前の広場に面して立つシント・ニコラス教会はまさにその象徴です。

彼の逸話がもう一つ。ある没落貴族に3人の娘がいたのですが、生活に困り果てた主人は上の娘を娼婦にして生計を立てようとしていました。これを知ったシント・ニコラスが夜そっとその娘の部屋に金貨を置いてきたおかげで、その娘はこれを持参金に幸せな結婚をすることができました。懲りないその主人はその後も次女、三女に同じ仕打ちをしようとしていましたが、結果はおわりの通りです。逸話では3度目にしてその貴族もようやくにして目が覚めたということになっているそうです。そして金貨を置いたところが干してあった靴下の中だったそうです。

こうした逸話の影響で、オランダでは12世紀くらいからシント・ニコラスの12月6日は子どもの祝日になり、その後、近世になってスペインからの独立を果たし、黄金時代を迎えたオランダでは景気の良いお祭りとして盛大に祝われるようになりました。